

# 場面緘黙の児童への担任による発話支援

○吉本悠汰

（春日井市立松山小学校）（医療法人永朋会 名駅さこうメンタルクリニック）

KEY WORDS: 場面緘黙 選択性緘黙症 特別支援教育

菅野晃子

## （目的）

DSM-5では、場面緘黙とは、話す力があるのに、学校などの社会的状況では話せなくなる状態を指す。学校における認知度は高いとは言えず、正しく理解、支援されていないこともある（成瀬・高橋, 2019）。早期対応のためにも、担任の協力は欠かせない。しかし、学校（園）と連携をしていたのは、国内の報告例全体の39.4%（15件）、学校で支援が実施されていたのは31.6%（12件）に留まった（水野・関口・臼倉, 2018）。このことから、担任が中心となった支援・報告例は少ないと考えられる。

本研究では、場面緘黙の児童に対し、学級内での発話を促進するための支援を行った。その結果から、担任が中心となった支援で症状をどの程度改善できるのか、また、学校においてどのような支援が有効なのかを検討する。

## （方法）

対象児は、小学校の通常学級に在籍する2年生の男児（以下、A児）である。園では先生と会話することはなく、1年生での発話は、健康観察の「はい元気です」、図書室での「借ります」のみだった。2年生当初は、うなずきや指差しはできたが発話は一切なく、「学校で話せるようになりたくない」という意思を示した。優しく活発であるが、友人がおらず、人間関係でも支援が必要と思われた。

2年生でのA児の支援には、第一著者（以下、T）、A児の母（以下、Mo）、第二著者であるA児の担当心理士（以下、Th）が主に関わった。研究成果を公表するにあたり、A児とMo及び、Th、学校長より書面にて了承を得た。

## （結果）

### 1. 安心できる環境づくり

4月、クラスメイトはA児への関わり方に悩んでいた。そこで、クラス全体に向けて「なっちゃんの声」という啓発絵本を読み聞かせた。それ以降、児童がA児への接し方を工夫する姿が見られるようになった。また、A児は皆と一緒に遊びたいが、自分からは輪に入れない様子だった。しかし、担任の声かけをきっかけにB児と遊ぶようになり、次第に友人が増えた。3学期には、A児が友人とのやり取りの中で笑いをこらえる姿も見られるようになった。

### 2. Tとの発話形成期

6月頃より、Tの前での発話を促すために、学校での発話練習を行った。まず、放課後の学校で発話練習をしたが、家族だけの場であっても一切声を出すことはなかった。次に、家庭訪問での発話練習を計5回行った。1回目から微かな発話があり、Tの前でも徐々に発話ができるようになった。その後、放課後の学校での発話練習を再び行ったところ、A児はTが横にいても九九が言えるようになった。

### 3. 少人数での発話形成期

3学期の最初には、Tと二人きりなら学校でも簡単な発話が可能になった。そこで、クラスメイトの前での発話を目標とし、練習を行った。この頃、A児は「友達と話せるようになりたい」と意思を示すようになった。また、2月上旬の学習発表会で九九の発表をすることになったため、A児はクラス全体の前で発話できるようになる必要があった。そこで、

3学期始業式頃から、B児と廊下で発話練習を行った。数日で、発話練習の場であれば、A児はB児と二人きりになっても、九九やしりとり、質問をしったり答えたりなどの簡単なやりとりが可能となった。第2週頃からは、他の友人との発話練習を行った。数日で、友人とも廊下であれば簡単なやりとりができるようになった。並行して、他のクラスメイトとの発話練習も行った。Tと一緒に廊下などの人目のない場で、数人の児童と簡単なやりとりを行った。A児が話しづらそうにした場合は、Tが「せーの」と声をかけた。1週間ほどで、人目のない場ならばTが離れてもやりとりを継続できるようになった。

## 4. クラス全体の前での発話形成期

1月第3週頃から、教室前での発話練習を行った。Tが児童を1人ずつ呼び、しりとりと質問を行った。徐々に人数を増やし、人目につく場所に移動した。数日で、Tがそばにいれば、A児は他の児童に見られていても、担任やクラスメイトと簡単なやりとりができるようになった。

発表会1週間前に、A児は初めて拡声器を用い、全体の前でセリフを言うことができた。前日には、拡声器を使わず全体に聞こえる声量を出すことができた。A児は本番、大勢の観客の前に、拡声器を使って声を出した。

発表会後は、発話できる内容、場面が急激に増え、A児の自信に繋げることができた（図1）。

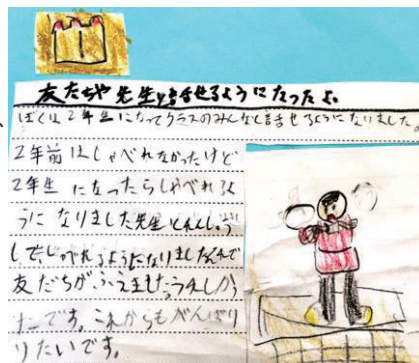


図1. A児の生活科の作品

## （考察）

担任が中心となった支援でも、学校での発話が一切ない状態から、受動的だが、発話が求められるほとんどの場面で声を出すことができる状態まで症状を改善することが可能だと分かった。学校での支援を進めるには、担任との間に信頼関係を築き、担任が話せる相手になることが大切である。そして、本人が話したいと思えるようになることが重要だと考える。そのために、友達づくりの支援など、話すことに意欲的になれるような支援が必要である。しかし、担任交代のことを考えると、支援方法の引継ぎなどの問題が生じてくる。緘黙児の将来のためにも、医療と連携し、長期的な支援が可能な環境を整えることが望ましい。

## （文献）

- 水野雅之・関口雄一・臼倉瞳（2018）日本における場面緘黙児への支援に関する検討—2001～2015年の論文を対象として— カウンセリング研究, 51(2), 125-134.
- 成瀬智仁・高橋克忠（2019）特別支援教育における場面緘黙児への援助—場面緘黙児支援の課題と支援方法の検討— 地域連携教育研究, 4, 66-72.
- (YOSHIMOTO Yuta, SUGANO Akiko)